

<へき地教育>

読む力を高めるための国語科複式学習指導 — 「一人学び」訓練と感想交流活動を通して —

キーワード： へき地教育 国語科複式学習指導 読む力 「一人学び」 感想交流活動

八重瀬町立新城小学校教諭 宮 里 哲 史

I テーマ設定の理由

小規模・へき地校における「読むこと」に関しては、個人差や学年差、間接指導などの複式指導の弊害が克服できず、読みの基礎・基本の定着が容易でないことや、多様な考え方に触れる機会がもてず、限られたものの見方や考え方をしてしまう傾向も見られる。また、大きな集団での活動経験が少ないため、児童の思考力や発想の多様性、論理性が不足ぎみである。さらに、語彙力や表現力が不足しがちで、発表意欲の乏しい児童が多いことから、読みの交流ができず、読み深めることができないことなどが課題に上っている。

そこで、国語科複式学習指導の「読むこと」に関する課題を解決するため、学習展開の中に「一人学び」訓練を定着させることで、どのような学習条件や学習環境においても、主体的に学習に取り組む態度や方法が身に付き、読む力を高めることができると考える。また、感想交流活動においても、自分の考えや思いを的確に伝えるための豊かな語彙力や表現力を身に付けることができ、互いの感想を交流させる中から、多様な考え方や論理的な考え方が育ち、新しい価値観が生まれる。さらに、自分の意見が相手に認めてもらえる喜びを知り、自身の存在感を得ることで、練り合い活動がより充実することをめざし、本研究テーマを設定した。

<研究仮説>

国語科複式学習指導における「読むこと」の領域において、「一人学び」訓練や感想交流活動を学習展開の中に計画的に位置づけることで、児童は主体的に学習する力が身に付き、思考の広がりや深化が図られ、読む力が高まるであろう。

II 研究内容

1 複式学級の特性を生かした国語科学習指導

本研究では、複式学習指導の特性をメリットとして捉えていくといった「発想の転換」が必要だと考える。そこで、複式学習指導における「読むこと」の学習において、間接指導の時間を「自学自習の場」と捉え、漢字の学習などの基礎学力の定着を図る活動やワークシートを活用した書き込み活動などを行うことで「一人学び」の定着を図りたい。また、練り合い活動において思考の深化を図る授業形態の工夫として学年間の感想交流活動を行う。さらに、2 個学年の児童一人ひとりの学習状況に応じて「個に『わたる』同時間接指導」といった学習形態の工夫を実践していく。

2 読む力について

本研究では、井上一郎（2003）による「読む力」と、学習指導要領の「読むこと」の内容と関連づけて整理し、読む力を「児童が、言語や言語で表現された内容について、これまでの生活経験や学習経験から得た情報で認識し、それを表現する能力。」と捉える。

3 読む力を高めるための「一人学び」訓練

本研究では、「読む力」を高めるための「一人学び」訓練に焦点をあて、「一人学び」活動としてその基礎を育てていく。そこで学習展開における具体的な「一人学び」活動として、「視写」「音読」「五感を意識した書き込み作業」「感想を書く」「ノートやワークシートの活用」について取り組んでいきたい。

4 感想交流活動について

直接体験の機会の多い複式学級における感想交流活動において、一人ひとりの学習活動に十分な時間を保障することで、教材を読み深めることができる。また、より多人数化を図り、多様な考え方に触れることで、思考力を育成できると考える。さらに、児童が自分なりの思いをもって読み、自分の読み力についての根拠を交流活動を通して明らかにすることで、自分の考えを見つめ直し、自らの読みを深めることができる。と考える。

III 指導の実際

1 第 1 回の検証授業について

第1回の検証授業では、「読む力」高めるための「一人学び」訓練と感想交流活動を重視した同単元指導として、6年生の教材「森へ」において検証を行った。読書単元は、言語事項において5年生への負担が少なく取り組みやすいと考え、本教材を選択した。

- (1) 単元名 「読書の世界を広げよう」
教材名「森へ」

2 第2回の授業実践について

第2回の検証授業は、第1回の検証授業の結果をふまえて、「一人学び」訓練と感想交流活動を重視した授業が学年別指導においても「読む力」を高めるために効果的であるかについて検証した。5年生は「わらぐつの中の神様」、6年生は「やまなし」の物語文教材において授業を行った。

- (1) 単元名
第5学年 「物の考えや生き方をとらえよう」 教材名「わらぐつの中の神様」
第6学年 「表現を味わい、豊かに想像しよう」 教材名「やまなし」

3 仮説の検証

本研究のテーマにある「読む力を高める」を目的とする研究実践ができたかについて、教師による毎時間の授業の記録や児童の感想の記録などから検証していく。

(1) 複式学級の特性を生かした学習形態の工夫について

複式学級の特性を生かした学習形態の工夫を検証するために、国語科「読むこと」の内容の物語文指導において、同単元指導と学年別指導の2つの側面から検証を行った。

児童の感想から「学習の進め方がわかって楽しく学習ができた。」「友達に教えることができてうれしかった。」といった記述があった。このことから複式学級において、「学習の手引き」を作成し、その手順に沿って計画的に学習する習慣を身に付けさせたことが、自主的な学習の進め方の定着を図るのに有効であると考えられる。

(2) 間接指導時における「一人学び」訓練について

① 学習振り返りカードから

「学習振り返りカード」に毎時間の反省を書かせることで児童は、学習の見通しを持つことができ授業に意欲的に参加していることが伺える。

② ワークシートから

五感を意識した書き込み作業を計画的に学習活動に位置づけることで、児童が主体的に学習に取り組む姿勢が見られた。ワークシートでの学習について、児童4人全員が「書き込むスペースが大きいので、書き込みしやすかった。」と感じている。「一人学び」活動においてワークシートの活用は基礎的・基本的事項の定着と児童の状況把握を見取るために有効であると考えられる。

(3) 練り合い活動を充実させるための感想交流活動について

感想交流活動は、「同単元指導における感想交流活動」と「学年別指導における2段階の感想交流活動」の2つの形態を行った。どちらの交流活動においても児童は、人数が増えることを楽しく感じている。複式学級において感想交流活動を行うことは、学習活動の人数が増えることにより児童の学び合いや思考の変化、活動の広がりにつながると考える。

(4) 教科書を読むことや「感想を書くこと」への意欲について

「読むこと」についてのアンケートの結果から、児童は「一人学び」訓練における「音読」や「書き込み作業」といった学習の手だてを知ることで、「読むこと」に対する意欲が高まったことがわかる。「感想を書くこと」については、感想文(200字)に要した時間が45分から15分に変容した(全児童)。これらのことから、毎時間の学習展開において、「書き込み作業」や「振り返りカード」などの活用を通し、五感を意識させ、具体的な視点を持たせた活動を計画的に設定したことで、児童は、書く材料を容易に見つけることができたと考えられる。また、「感想を書くこと」への抵抗感を弱めることに繋がったと考えられる。

IV まとめと今後の課題

「読む力を高めるための国語科複式学習指導」をテーマに、2回の検証授業を実施して研究を進めてきた。同単元指導、学年別指導のいずれにおいても、児童は、五感を生かした書き込み作業を通して、主体的に学習する態度を身に付けることができた。また、感想交流活動において多人数化を図り、練り合い活動を行うことで、児童の読みの思考を広げ深めることができ、読む力が高まったと考えられる。今後の課題としては、基礎的・基本的事項の定着には個人差があるため、より個に応じた「一人学び」活動への支援を図る必要がある。